

〈本書は体験版です〉

インデイステインクト+Q

第11話 発生地点と攻撃範囲

庫発りべるき

〈はじめに〉

本書をお読みになる前に付属の利用上の注意をご確認ください。

〈追加注意事項〉 この物語はフィクションです。実際の事件・人物・団体などは関係ありません。

〈本編開始〉

十一月の夜。北陸地方の県にあるN市。その場所は田園風景が多い地方の市内にはにぎやかなところだった。

どこにでもあるような飲食店だった。その店では飲み会向けの大きな部屋がある。

その日は特に大きな団体は入らず、従業員たちも個人または小規模グループの対応をしている。

酔いがまわって大きめの声で会話をする者もいれば、飲食物を堪能する者もいる。

外は少しの小雨。ところどころに街灯がある。

店の裏側。利用者からは目立たないし、従業員の目に触れることも少ない。

そこにそれはあった。

なんだか小さい箱だ。

店内の客や従業員がそれに気が付く様子もない。

そっけなく存在している姿。目立つことも無い。

しかし、である。

次の瞬間、それは起こった。

ほんの一瞬だった。大きな音と光が周囲に向けて飛散したのは。

「何だ！」

客の一人が叫んだ。

「爆発したような音だったぞ！」

別の客も叫ぶ。

騒ぎが起きてから少し経った後、店員の一人が恐る恐るドアを開ける。

何者かによる攻撃の可能性が大きいと思いき、警戒しているのである。周囲を確認しながら外に出る。

（まさかこの田舎で何者かがテロ行為でもやってんじゃないだろうな？）

一人の男性従業員は不安になりつつも音の発生源に向かっていく。やがて店の裏側で何かを発見した。

小さい箱が焦げ跡で大部分が黒く染まった状態で置かれていたのである。

焦げた臭いと煙がただよう。その様子から物体の正体が容易に想像できた。

「た、大変だ！」

客に動揺を与えないよう小さく、しかし、はっきりとした声で他の従業員に伝えた。

「大きな声では言えないがよく聞いてくれ。爆弾だ」

「爆弾!？」

近くに居る他の従業員達が驚きの声を上げる。発見者と同様、客への影響を考慮したのかそんなに大きな声ではない。

従業員数名と店の経営者が現場に向かい、状況を確認する。

「これは…?」

一人の従業員が声を出す。

「警察に連絡を！」

店の経営者が従業員達に呼びかけるように言った。

発見者の男性従業員が警察に連絡を入れる。

やがて管轄署であるN警察署の関係者がやってきた。爆発物の発見者の従業員は警察に発見したいきさつを語った。

警察は慎重に問題の箱を見ている。見るからに爆発した跡がある。

問題の爆発物は警察に調べられることになった。

時限式爆弾といったところである。セットされた時間になると爆発を起こすようになっていた。

爆発力についてはそんなに強いものではない。そこらへんにある

もので爆発しそうなものや、爆弾の形状づくりに役立ちそうなものを寄せ集めたような感じだった。

とはいえ、きちんとした仕組みが組み込まれている以上、爆発は起きる。場所によっては火災などにつながってしまう。やはりそれなりに危険である。

爆発物の構成についてはわかってきた。犯人像はどうだろうか。

警察では店の関係者や客とのトラブルがらみ、悪質なイタズラといった愉快犯もだが、社会への不満から無差別に他者を攻撃するケースも視野に入れて捜査していくことにした。

それから何日か経過。N市のN警察署が事件を調べるために各方面を調べているそのとき、ある建物に郵便物が届いた。

正門には建物の名称が記されている。N市の中小企業や商店向けの団体に關わる建物のようだ。

中年の女性職員が封筒を郵便受けから取り出す。自分の机に戻り、郵便物を確認する。

何通かあるが、どれも団体がらみのいつもの用件のようだ。

そう思っていると、やがて一つの封書が目に入った。

差出人が書かれておらず、宛先がワープロ表記だった。

封筒の中身は普通の書類を思わせるものだった。

しかし、書かれた内容を見てみると――

開封した封書を前に、職員数名が複雑な表情を浮かべている。

「……イタズラなのか?それにしても……」

「タイミングを考えると、万が一……」

結局建物の職員が何かのためにとコピーをとり、現物は警察に届けることにした。

届けられたN警察署では飲食店での事件もあり、複雑な面持ちで見ている。

封書にはこのような文面が書かれていた。

「N市の全飲食店に告ぐ。先日の爆発は警告だ。

店の中にはアルコール類飲み放題のサービスをおこなっているところもあるだろう。

今回選んだ店もそういったことをしていた。

しかしアルコール類は飲み過ぎれば本人の身体を壊す。また、自己制御が利かなくなり、周囲にも暴力などの形で害をなす。

そういったことを助長するを見過ぎすわけにはいかない。

N市すべての飲食店で速やかにこういったサービスを中止せよ。

聞き入れない店が一軒でもあれば、市内の飲食店を無差別に攻撃する。

たとえ他の店が聞き入れたとしても、だ」

さらに文面には聞き入れるまでの猶予期間として期限とされる日付が書かれており、捜査関係者が見ているこの日から十二日後が指定されていた。

期限最終日から日付が変わった瞬間をもって期限切れとするとも

書かれていた。

「こ、これは……」

捜査員の一人が何か思ったように声を出した。

「送り主は一体何が目的なんだ？」

捜査関係者一同、不思議そうな面持ちで見ている。

「さっきここに市民から届けられたものと同じだ」

市民からの届けがあった時点ですでに、N警察署にも同じものが郵送で届いていたのである。やはり差出人は書かれておらず、文面はまったく同じ。

同じ頃、N市警察署に何件もの電話が入っていた。

いずれも県内の報道機関からだった。電話の内容も似たようなもの。

送られてきた文書には最後のほうにこんなことも書かれていた。

警察関係者やN市が所在する県の各新聞社や放送局にもこれを送ってある、と――

「もし差出人が飲食店の爆発物がらみだとすると……何らかの形で酒をめぐるトラブルに巻き込まれ、そのことに関してわだかまりを持っていたのか？」

実際に酒をめぐる何らかのトラブルが発生するケースは少なくない。

飲みすぎて体調を崩し病院に運ばれるケースもあれば、自己制御が利かなくなり他人に暴言や暴力を振るうケースもある。

N警察署でも酔っ払いがらみの事件で警察官が手を焼いたケース

が多々あった。

また日本全国では無理に多量の飲酒を強要された形で最悪、死亡に至ったケースも多い。

直接的な強制でなくても先輩・後輩などの上下関係をタテに断りにくい状況を利用して、心理的圧力を加えたと思われるケースもあった。

「ここから犯人像を絞り込めないだろうか」

捜査員の一人が口にする。他の捜査員もその言葉に応じるような様子だった。

別の捜査員が口を開く。

「それはいいんだが…」

何か気がかりがありそうな表情だった。そして、こう言った。

「消印が関東なんだ。ここは北陸。どこの誰が何のために飲食店で爆発騒ぎを起こしたり、関係しそうな犯行声明を出したりしたのか……」

「ああそうか。犯人像を探るといっても酒をめぐるトラブルなんてそこら中にあるしな」

翌日、期日まで十一日となったその日、N市の中小企業や商店向けの団体の建物では、飲食店の関係者が一同に集まった。

臨時に会議を開き、今後の対応を検討することになったのである。

N警察署からも関係者が来ている。警察としても新たな事件を防止することも考えなくてはならないと考えている。

飲食店関係者達は口々にこう言った。

過剰な飲酒はよくないという店では犯行声明にも一理ある。

しかしだからといってこんなやり方はいただけない。営業妨害だ、と。

また、仮に飲み過ぎ、飲ませ過ぎで問題を起こしたとしても、それは節度をわきまえない者の問題であり、酒類飲み放題サービスをしたことで直ちに店側に制裁を加えることがおかしい、と言う者もいた。

表向きは「不当な要求に屈しない」で全員一致のようだが、実際のところはたくさん酒が飲めるサービスを楽しみにしている客が離れてほしくないという思惑も混じっている。

さらに出席者の中にはここまで話が大きくなった以上、警察や市民などが警戒するだろうことを思うと、おいそれと手出しができないだろうから極度に不安がる必要は無いのでは、という声もあった。

また、正直なところある意味気分が悪いところもあった。というのも昨日、警察や報道機関に犯行声明が送られた後、N市のそこらの飲食店に警察官がやってきて、彼らはこう聞いてきたのである。

過去に店内で起きた酒をめぐるトラブルがあれば教えてほしい、と。

しかも警察官の訪問は営業時間内。警察が意味深な様子で居る状態がお客さんに見えてしまう。

もつとも、警察としてはいち早く手がかりになりそうな情報が必要だったし、店側の事情も考慮して客からは目立たないところで語

ってもらおう形をとったのだが。

とは言うものの、質問内容が過去に自分の店で起きた酒をめぐるトラブルはなかったか、あればできるだけ具体的に教えてほしい、というものだったため、店にとっても答えるのに気乗りしないことだった。

警察の狙いは犯行声明の文面から酒をめぐるトラブルや事件・事故に巻き込まれた者が犯行に及んだ可能性を考慮し、そこから犯人の正体を探っていく、というものだった。

犯行声明の消印は関東だったが、差出人をわかりにくくするためN市またはその周辺の者があえて遠出をした可能性もある。

そういつた警察の考えがわかっていても店の関係者達は、やはり複雑な心境になる。

今回集まった飲食店の中には企業の忘年会・新年会など、大掛かりなイベントに対応しているところも多い。当然、相応のお客様が利用してくれている。

今年もまた、そのシーズンが近付いていることもあり、稼ぎ時だと考えている店も多い。

残念なことにそのお客様の集団の中には酔った勢いで他人に害をなす者もいた。

そのとき該当する集団、特に企業では害を受けた者に「酔った勢いでついやってしまったただだからそんなに怒らないで」と、どうにかしたこともあった。

もっとも、どうにかしたといっても会社の上下関係を利用した力

添えによるところが大きく、害を受けた者が不満をくすぶらせている可能性はあるかもしれないが。

とにかく、場合によっては個人の客はおろか大規模のお客様にとって好ましくないを警察に明かす必要もあったし、それをきっかけに当該企業・団体に警察がやってきたとなれば、店側としてもいい気持ちがない。

なじみの常連客にとっても不都合なことを言わざるを得ない。

しかしある意味、「すでに攻撃が開始されている」状況なのもまた事実である。

結局どの店でも、もしお客様からの問い合わせがあれば公共の安全上警察に情報提供せざるを得なかったと答えようということ、警察への情報提供に至ったのである。

一方、会議に出席していた警察関係者もそれなりに複雑な思いを抱いていた。

不当な要求に屈することがいいことだとは思わないし、犯人の要求が満たされたとしてもそれで事態が収まるのかはわからない。

とは言うもののどこまで警戒態勢が取れるかわからない。

これからの忘年会・新年会シーズン、市内の飲食店で立て続けに大きな飲み会が開かれる。多くの市民の安全確保も考えなくてはならない。

結局、飲食店関係者達は具体的な結論には至らず、酒類飲み放題の扱いについては各店の判断しだいとして、利用者の安全を第一に考えた上で営業しようということになった。

十二月、忘年会のシーズン。すでに犯行声明の期日が過ぎてから何日も経っている。

先日の犯行声明に対して、N市の飲食店の反応はさまざまだった。万が一のことを考慮して酒類飲み放題を控えた店もあれば、そのまま飲み放題を続けた店もある。

さすがに実際に爆発事件があった店では安全を考え、飲み放題のサービスを当面、取り止めにした。

警察のほうでは市内の飲食店周辺を重点的にパトロールをしている。

いつ何かが起こるかわからないということでそれなりに緊迫感を漂わせている。

さらにN警察署では犯行声明が送られてからこの日まで、市内での酒をめぐるトラブルを調べていた。

しかしそういった話はそこら中に転がっていて、犯人にたどり着くのに時間がかかりそうである。

またN警察署だけではおぼつかないであろうことも含まれるため、犯行声明が投函されたと思われる郵便ポストが所在されるであろう警察関係者にも連絡を入れた。

言い換えれば調べるべき対象となりうる可能性のある人物が最低でもN市周辺だけではなく関東地方にまで及ぶ。

爆発事件の犯人探しは時間がかかりそうである。

N市で忘年会を開く予定の企業・団体も、この年はある種の慎重

さをもつて忘年会や新年会を企画している。

会場をN市以外の市町村に切り替えたところもある。

どうしようか悩んだ挙句、付き合いの多いなじみの店でいつも通りに開催する予定の企業もあった。

中にはここまで警察が警戒していれば心配は無いらろうと、特に気にせずいつも通りの店でやろうという者達もいたが。

その一方で不安に駆られた企業があったのも、また事実である。

まさか自分のところの従業員が犯人だったら、そしてそれが発覚して大々的に報じられたら：

そうでなくとも、自分のところの従業員が何らかの不満から事件に便乗して何かやらかしたら：

そう考え、酒を飲むにしても後で尾を引く結果にならないよう十分注意せよと社員に呼びかけたのである。

N市の飲食店付近で爆発騒ぎがあったから相当長い月日が経過した。

忘年会のシーズンが終り年が明け、新年会のシーズンを迎えた。

忘年会のシーズンでは酒類飲み放題サービスを続けていた店も多かったが、これといった出来事は無かった。

新年会のシーズンも……何事も無かった。

「何事も無く数ヶ月。一安心だろうな」

人々はやがて、そう思うようになった。

そしてN市の飲食店の中で、警戒して飲み放題サービスを控えて

いた店でも再開するところが出てきた。

また警察も事件発生の可能性が低くなっていると判断し、警戒態勢の規模が小さくなってきている。

季節は変わり、春。新しい生活の幕開けという人が多くなる。

N市の各企業でも新入社員の歓迎会の時期がやってきた。

団体向けサービスをしている飲食店にとっては、再び稼ぎ時となった。

以前はやむを得ずサービス内容に制約をかけたなりそのあおりで利用者が減った飲食店関係者も、今度は心配せずにサービスするからドンドン利用してくれ、なんて謳うところもあった。

店の公式サイトで大つびらにビール飲み放題、なんてところもあった。

夜。昨年十一月に爆発騒ぎがあった店。事件後は酒類飲み放題サービスを抑えていたが、それから何事も起きないままかなりの時間が経過。新たな事件の発生については心配ないだろうとサービスを再開している。

そこから遠く離れたところに別の飲食店があった。

大きなイベントは無く、個人または小規模のグループのお客さんがいる。

あの時と同じだった。そう、あの時と――

暗がりに「何か」があった。

そして――

それもあの時と同じだった。派手な音を立てて、皆に驚愕を与えたあの時と――

警察が動いてから程なく、やがて再びやってくる。関東地方の消印で。犯行声明があちこちに、と。

〈N市の全飲食店の者達よ。覚えているか、警告を。〉

N市内で指定された期限を過ぎてもアルコール飲み放題サービスをおこなっている飲食店が一軒でもあれば、市内の飲食店を無差別に攻撃する、と。

残念なことにインディスタインクト+Qが攻撃せざるを得なくなつたようだ。〉

今回の文面はそれだけだった。

爆発騒ぎへの関心が薄まってきたときに再び起きた同様の出来事で、N市は騒がしくなっている。

インディスタインクト + ^{プラスキュー}Q ―――

インディスタインクト (indistinct)、英語で形状などが不明瞭な、といった感じの意味がある。

+Qについては、クエスチョン (question) から、人々がいろいろ追求してみたくなるほどの興味を寄せ付けてしまう要素も含まれ

るといったことを表すようだ。

すべてがそうというわけではないが、インディセント+Qと呼ばれる者の中には、作戦の実行後、失敗した場合のみならず成功したとしても、寂しげな様子で自らの手で人生を終わらせる者が少なくない。

それも人々の興味を引きやすくなっている。

作業員という表現が適切かどうかかわからない形式で、かつ作業員のようなインパクトを与えるほどの言動を取った者をこう呼ぶようになったと考えられる。

但し本職の作業員が任務に従って行動した場合でも状況しだいではインディセント+Qと呼ばれることもある。

そういったところでは定義があいまいなところもある。

ネット上では割とよく聞く言葉だった。

インディセント+Qと呼ばれる者はその特徴上、どうしても警察の手を煩わせることが多い。全国の警察関係者の間でそれなりに浸透している言葉だった。

N警察署でもそこそこ有名な言葉。

それにしてもなぜ、N市の飲食店を標的にしたのか。正体は何者なのか。単独犯なのか複数犯なのか。

いずれにせよ、自分達がインディセント+Qと対決することになりそうだ——それがN警察署の署員たちの認識だった。

一方——

どこにでもありそうなアパート。アパートの一室で一人の若い男らしい服装をした者がノートPCを見つめている。

あるニュースサイトが表示されていた。N市の爆発騒ぎ、再びといった感じで書かれたニュースだった。

自分がやったことがここまで注目されている。爆発の成功を確認。何とかやり遂げたという気持ちでいる。

ここまでは計画通りだ。だが喜ぶつもりはない。

喜ぶにはまだ早い。まだ始まったばかりである。その人物はそう考えている。

今後さらに警察が本腰を上げてくるだろう。また、N市の市民達も不安と警戒が強まってくるだろう。

そのことも忘れてはならないと考えている。

予想通り、N警察署では今回の事件での短い犯行声明文のある単語に興味を持っていた。

インディセント+Q——

犯人は自分、または自分達が何らかの作業員として活動しているというメッセージを世間に送ったのか。捜査関係者たちはそのように考えている。

昨年十一月の事件以降、世間の関心が薄まってきていたときにもある程度の捜査体制を保っていた。

情報収集などもそれなりにしていた。

それでも捜査はなかなか進まなかった。

残念なことにまた事件が起こってしまったが、今回は犯人と思える者がある種の流行り言葉を犯行声明で使ったことで、多少でも世間の関心が高まれば情報が集まりやすくなるかもしれない。捜査関係者はそう考えた。

実際、N警察署には情報と思えるものが集まってきている。

しかし、酒をめぐるトラブル自体がN市とその周辺で多いのか、そこから自分の所属する大学ではないか、会社ではないか、という電話が多数だったため、どれが有力情報なのかわからなかった。近くの地域の大学のOBと思われる人物から、こんな電話があった。

大学関係では過去のトラブルが今になって次々と明らかになる、といった感じだった。

所属サークルでは当時後輩に吐くまで飲ませる習慣があった。トラブルについては先輩から口止めされていた。数年経った現在、皆大学を卒業したことでしがらみが薄れていったことと、もしかすると自分の周囲にいた者がわだかまりから膨大なテロ行為を起こしかねないという懸念を抱き、思い切って電話を試してみたのだという。

「これはいけるかもしれない」

ある程度具体的な情報だから手がかりがつかめそうだと、大学に飛び込むように捜査員は走った。

しかし伝統に名を借りた悪い慣習が長年続いていた、というより

今も続いているようで、被害者は少なくないようだ。

おまけに県外から来ていた学生もいて、大学関係者（元関係者を含む）だけに絞ったとしても、それなりの人数と範囲に捜査の手を広げることになる。

大学のOBが卒業後もしがらみに縛られている可能性もある。OBが在校生をしがらみで縛っている可能性もある。情報収集は簡単だとは思わないほうがいい。

その辺のことも捜査員達は強く認識していた。

もちろんこの大学に関係ない者の仕業の可能性もある。そのことも踏まえた上で今後の捜査をおこなっていくことにした。

その会社の所在地はN市から少し離れたK市。

「ありはた有畑がやたらと部下に飲み会に参加しろって言ってきたらしいぜ」

始業開始前。男性社員数人が何か噂話をしていた。話に出てきた有畑という男は、ある部署の課長の苗字。

「ああ。新年会や新入社員歓迎会になると『職場の一体感を高めるために必要なんだ。仕事だと思って参加しろ』と迫るように言ってくるよな。」

飲み会を開くのはいいがさすがにこんなやり方はあんまりでは、という声も少なくなかった」

「たしかあのとき、酒にまつわるトラブルがあった」

あのとき——この会社のある部署で今から二年前の一月、新年会で飲み会をめぐるトラブルがあった。

「ある男性社員が最初は渋っていたが、有畑に促されて断りきれずに参加したらしい。

その飲み会で勝台が酔った勢いで荒れてしまって、アイツにケガを負わせた」

勝台という苗字の男。四十一歳の社員で、有畑の部下。話に出てきた「ある男性社員」は現在二十五歳。

「ケガ自体は軽症で済んだが…あのあと、アイツと会社の間でトラブルに……」

「しばらく無断欠勤をするようになって…しかも上司の無理強いがあつて参加してあんな目に遭つたのだから労災扱いにしてくれと言い出した。休んだことについてもそれなりに扱ってくれとも言つた。

有畑は、トラブルについては本人達で話し合つて解決してくれと言つたらしいが、本人が納得しなかつた」

「会社は関係部署の上司クラスや勝台に、飲み会について注意を促すなどした。

勝台は反省した様子だったが…、有畑は飲み会があるたびに無理強いに近い言動で参加させようとする言動が収まる様子は無かつた。

結局アイツは会社を辞めてしまった」

この会社ではトラブルの後、こんな噂が流れた。

「アイツが勝台から仕返しされたのではないかと言われている。また、有畑が圧力をかけて泣き寝入りさせたとも」

実際元社員はあの飲み会でケガを負わされた後も勝台に暴言を吐かれたらしい。相当な恐怖を植えつけられたと言われている。

そして噂話の集団の中の一人が何かを思い出したようにこう言つた。

「爆発騒ぎがあつた店とは別になるが…問題となつた飲み会の会場もN市にある」

暴力騒ぎの後、会社は関係者に事情を聞いた。

有畑は社員達が打ち解けあえるようにと飲み会に参加させることを促したと説明。

確かに仕事だと思つて参加しろと言つて会費を参加者個人に負担させることを求めるなど問題はあつたかもしれないが、それについては今後、改めるようにしていると答えた。

もっとも、飲み会を開いてみたところで会社の間関係の問題がすべて解決できるというのはある意味思い込みとも考えられる。

ましてや酒にまつわる問題について必要最小限度の考慮も無しで開いたり参加したりすれば、酔つて自己制御が利かなくなり暴言や暴力につながる。

他の参加者や第三者だって、たまたま酔つた人間が近くにいたために不快な状況や恐怖にさらされたとあつては納得ができないであらう。

また、無理に飲まされて身体をめちやくちやにされたり、最悪帰

らぬ人になったとあっては、当の本人はおろか、遺族だって納得できないうであらう。

ちなみにこの会社では、どの部署でも休日に飲み会を開いていた。なお飲み会を強制参加させたり出費を余儀なくさせること自体、法的に不当とされる可能性がある。ましてや、本来自由にさせるべき休日や、自由に使用させるべき給料に手をつけたならなおさらである。

有畑の言い方について会社内では、当たり障りの無い答え、という声が多数だった。

会社側は勝台にも当時のことを聞いた。勝台は不機嫌そうに、しかし、力が抜けたように答えた。

「確かにあのとき、酒の勢いでついアイツにヒドイことをしたさ。でもその後、俺だって反省しているんだよ」

勝台はこれまで酒に関する問題行動が少なくなかった。会社側でも注意をすることはあり、そのときは反省するそぶりを見せたが効果の程はいまひとつだったのでは、と他の社員たちが語ることもある。

元社員のケガの件についてももうやむやに終わらせた印象が強い。

一方、会社内で何か難しそうな顔をしている人物がいた。

それが——有畑だった。

(もし彼がああのことを根に持ってN市で爆破事件を繰り返しているとしたら…)

そのとき、有畑もそれ以外の会社関係者も気付いていなかった。自分達の勤務先を遠くから何かの機器で見つめる人物の存在に——

〈続きは製品版で〉

著者 庫発りべるき

発行 データコーディネートフォルダー

二〇一六年一月九日

(C) Kohatsu Riberuki 2016